

2019/01/20

「どうやって慰めを得る？」

「あなたの罪は赦されています。」（ルカ 7:48）

「あなたの信仰が、あなたを救ったのです。安心して行きなさい。」（ルカ 7:50）

イエス様からこの言葉を語られた女性は、神からの慰めを受け取りました。すべての人は、この世界で様々な苦しみを背負い、慰めを必要としています。日常生活の中で怒ったり腹立たしく思ったりするのは、結局のところ自分の願うような慰めが得られなかつたということを表しているのです。

しかし、どんなに有能な人であっても、完全な慰めを与えることはできません。ですから、すべての人は、求めている慰めを受けることができずにいます。私たちを本当に慰めることができるのは、神お一人です。どうすれば、その慰めを受け取ることができるのでしょうか。

■彼女は自分の罪を悲しみ、救いを求めていた

「さて、あるパリサイ人が、いつしょに食事をしたい、とイエスを招いたので、そのパリサイ人の家にはいって食卓に着かれた。すると、その町にひとりの罪深い女がいて、イエスがパリサイ人の家で食卓に着いておられることを知り、香油のはいった石膏のつぼを持って来て、泣きながら、イエスのうしろで御足のそばに立ち、涙で御足をぬらし始め、髪の毛でぬぐい、御足に口づけして、香油を塗った。」（ルカ 7:36-38）

この女性がどんなことをしていのかについて聖書は語っていませんが、人々から「罪深い」と見られていたことがわかります。そんな彼女がパリサイ人の前に出て行ったらどうなるか、彼女はわかつていたはずです。パリサイ人は、人の罪を責め立てる人たちです。なるべく人の目に留まらないように生きていた彼女が、罪が責められて公にされることもいとわず、イエス様がおられると聞いてやってきたのはなぜでしょうか。

それは、彼女自身が自分の罪を悲しみ、どうしたらこの罪が赦されるのか、常に心にかけていたからです。彼女を駆り立てたのは、自分の罪への関心です。

もしあなたがいのちに関わる難病にかかり、その病を治すことのできる唯一の医者が近くにいると聞いたらどうするでしょうか。人の目を気にしている場合ではないと、とにかく面会を求める事でしょう。同様に彼女は、自分の罪を悲しみ、切に赦しを求めていたのです。つまり、神の慰めを受け取るために必要なことの第一番目は、自分の罪を悲しみ、赦しを求めているということです。実はその時私たちはある意味自由になるのです。それは、人からどう思われるのかを気にする思いからの自由です。

人が思い煩う苦しみの大半は、人からどう思われるかということです。自分の罪を思い煩

って苦しむ人はほんのわずかで、多くの人は自分をわかつてもらえないことで苦しんでいます。そこで、自分を受け入れてもらおうとして人の目を気にするようになり、それがまた苦しみになります。しかし、矢も楯もたまらずイエス様のもとにやってきたこの女性には、そういう思い煩いが一切ありません。本気で自分の罪と向き合って悲しみを覚え、赦しを求めるなら、思い煩いは消え、自由になるのです。彼女は、自分の罪に絶望し、赦しを求めました。この絶望こそが、ある意味、私たちを思い煩いから解放する自由になります。

また、この時彼女を動かしていたものは、自分の悲しみや苦しみだけではありません。悲しみや苦しみはうわべの姿であり、彼女を突き動かした本質は彼女の信仰にあります。この時、彼女はイエスを信じる信仰を働かせていたのです。イエス様は彼女に向かって、「あなたの信仰があなたを救った」(7:50) と言われました。自分の罪に絶望し、赦しを求める時、そこには信仰が働いています。

神の慰めを受けるためには、信仰が必要です。「神様は今抱えている問題を解決してくださる」と信じることも信仰ですが、自分の罪に悲しみを覚え絶望することによって、本当の信仰が働きます。「なんとしてもこの罪を赦してもらいたい」と願うと、他のものは一切見えなくなり、思い煩いは消えてしまいます。この時、私たちの信仰は最高潮に達しているのです。

ですから、本当の信仰を持つためには、絶望する勇氣が必要です。自分の罪に絶望して赦しを求める心を持つ時、それまでの不安や思い煩いは消え、私たちは自由になります。思い煩いから解放され平安になるには、自分の罪と向き合って悲しみを覚えることが必要なのです。

■彼女は何もしなかった

「イエスを招いたパリサイ人は、これを見て、「この方がもし預言者なら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知つておられるはずだ。この女は罪深い者なのだから。」と心ひそかに思つてゐた。するとイエスは、彼に向かつて、「シモン。あなたに言つたいことがあります。」と言われた。シモンは、「先生。お話しください。」と言つた。「ある金貸しから、ふたりの者が金を借りてゐた。ひとりは五百デナリ、ほかのひとりは五十デナリ借りてゐた。彼らは返すことができなかつたので、金貸しはふたりとも赦してやつた。では、ふたりのうちどちらがよけいに金貸しを愛するようになるでしようか。」シモンが、「よけいに赦してもらったほうだと思います。」と答えると、イエスは、「あなたの判断は当たつています。」と言われた。そしてその女のほうを向いて、シモンに言われた。「この女を見ましたか。わたしがこの家にはいって來たとき、あなたは足を洗う水をくれなかつたが、この女は、涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐつてくれました。あなたは、口づけしてくれなかつたが、この女は、わたしがはいって來たときから足に口づけしてやめませんでした。あなたは、わたしの頭に油を塗つてくれなかつたが、この女は、わたしの足に香油を塗つてくれました。だから、わたしは言つてゐます。『この女の多くの罪は赦されています。というのは、彼女はよけい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。』」(ルカ 7:39-47)

イエス様は、この女性に「あなたの罪は赦されている」と言いました。では、この女性は赦されるためにいったい何をしたのでしょうか。答えは、「何もしなかった」です。神の慰めを得るためにには、何もしなくても良いのです。

パリサイ人は、赦しを得るためにはどうすればいいのだろうと考え、律法を守り、行いを大切にしました。イエス様を食事に招くのもその表れです。彼らは、自分は主の前に立つ権利があり、主に愛されると思っていました。

しかし、彼女はイエス様の前で一言も発することなく、ただ黙って泣いていました。それは、自分は神に愛される価値はない、自分は神の前に立つ資格がないと知っていたからです。彼女はただひれ伏して泣くしかなかったのです。彼女が何もしなかったからこそ、イエス様は、この女性の罪は赦されていると言われたのです。

私たちは神の前に何もできない人間であり、黙っているしかありません。それでいいのです。自分は価値があるから神に愛されるのだと思う時、人は神から最も遠い存在になります。そうではなく、自分は取るに足らない者だと知る時、神の慰めを受け取ることができます。

ある時イエス様は、宮でパリサイ人と取税人の祈りをご覧になりました。パリサイ人は、「自分は断食ができて、献金ができて、良い行いができて、この取税人のようではないことを感謝します。」と祈りました。一方、取税人は自分の罪を悲しみ、「この罪人の私を憐れんでください。」と祈りました。この時イエス様は、この取税人こそ義とされると言われました。

「自分を高くするものは低くされ、低くするものは高くされる」と聖書は教えています。神の慰めを受けたければ自分を低くすることです。低い自分を認めて、自分には何もできない、神に何かを求めるこすらできないとひれ伏す時、イエス様は「あなたの罪は赦された」と宣言なさいます。

神の慰めを受けるとは、自分は何もできず、愛されるに値しない人間だと知ることであり認めることです。その時私たちは神によって高くされ、慰めを受けるのです。

■彼女はいつ赦されたのか

「そして女に、「あなたの罪は赦されています。」と言われた。すると、いっしょに食卓にいた人たちは、心の中でこう言い始めた。「罪を赦したりするこの人は、いったいだれだろう。」しかし、イエスは女に言われた。「あなたの信仰が、あなたを救ったのです。安心して行きなさい。」」（ルカ 7:48-50）

「あなたの罪は赦されています。」(7:48) とは、原文では完了形が使われています。つまり、彼女はイエス様に香油を塗った時に赦されたのではなく、その前から赦されており、今もその状態が続いている状態だということです。

聖書は、「罪を言い表せば赦される」「イエス様の十字架は私たちの罪があがなわれるため」と教えています。すると、言い表せなかった罪はどうなるのか、病気や障害、乳幼児など、

罪を言い表せない者は赦されないのかという疑問を持つ方がいますが、そんなことはありません。私たちはすでに赦されているのです。

イエス様は裁くためではなく、救うために来られました。私たちはすでに赦されているのですが、今なお私たちが罪に苦しむのは、それが自分にとって真実になっていないためです。イエス様の十字架は、私たちがすでに赦されている保証です。イエス様は、「あなたの信仰があなたを救った」と言われました。信仰によって、それが真実だとはっきりわかるようになることが、私たちの慰めになります。

この女性は何も語らずにひれ伏し、香油を塗り始めましたが、イエス様はそれに対して何も言わず、彼女ではなくペテロに語りかけておられます。女性の目的は分かっているのだから、女性に語りかければいいのではないかと考えてしまいますが、イエス様がこの女性と話をしていないのには意味があります。それは、この時すでにこの女性は完全にイエス様と一つになっていたということです。彼女はイエス様の愛のもとにひれ伏して、ひとつとなり、慰めを得てしまっていたため、イエス様は彼女に何も教える必要がなかったのです。彼女は、イエス様のもとに来たとき、罪が赦された安息を手にして、安堵と嬉しさのために涙を流しているのです。だから、イエス様は『この女の多くの罪は赦されています。というのは、彼女はよけい愛したからです。』と言われたのです。

信仰とは、神のもとに行こうとする運動のことです。これを「愛」とも言います。「愛」も「信仰」も、神に近づこうとする運動で、同じものです。誰もがこの運動を持っているのですが、様々なことに気を遣って思い煩い、なかなか神に近づくことができないでいます。つまり、信仰が働いていないのです。しかし、自分の罪に絶望し、何としても赦してもらいたいと願う時、他のことが気にならなくなり、信仰（愛）が働き始めます。そして、神のもとに来たときには、赦しはもう確定しているのです。

何が私たちの慰めになるでしょうか。慰めとは神と一つになることです。私たちが神の前にへりくだって、神と一つになれることこそが、安息です。彼女はその安息を手にしました。その導入のカギは、自分の罪に苦しみ、悲しみ、それが赦されることを求めたことでした。彼女は自分の罪に対して自分が何もできないことを知って絶望し、ただ神の前にひれ伏しました。その時、彼女は平安を得たのです。彼女が、何かをしたわけではありません。彼女は何もしませんでした。私たちが慰めを受けるために必要なものは、神のもとに近づこうとする信仰だけです。